

---

## 令和2年度の博物館実習(館園実習 ・学内実習・見学実習)について

九州保健福祉大学学芸員養成課程

---

令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大が随所に大きな影響を与えた。多くの学生が在籍している大学や、公共機関である博物館においては最も注意しなければならない事態となった訳であるが、資格取得を目的とする授業科目であり、現場を知る上で極めて重要な位置付けにある実習科目についても、実習先・大学双方の組織的な関係性の難しさが如実に露呈した年度であったと言ってもいい。

今年度は6名の学生を博物館実習生として学外の館園に依頼したが、新型コロナウイルス感染拡大によってやむを得ず実習が中止となった所が相次ぎ、例年以上に実習先選択・確保が困難であった。館園・大学双方の努力のみならず学生保護者の協力によってなんとか全ての学生の実習参加が叶ったものの、実習期間短縮によって規定授業時間数の消化が難しくなり、一部日程を他館に引き受けて頂いたり、学内でのプログラムに振り替える等の措置を行ったケースもあった。

見学実習についても感染の影響が及んだ。今年度より本学学芸員養成課程での博物館概論履修が2年次から可能となった事もあって、2・3年次生の見学参加となった。見学場所は宮崎県総合博物館と宮崎県立西都原考古博物館の2館と毎年度と同じである。

この見学実習では例年、西都原考古博物館内にあるラウンジにて昼食を採るようにしている。これは同ラウンジが障害者支援施設の就労支援によって運営されており、インクルーシブな機能を有する公共施設としての博物館は、多様な人々を積極的に内包していく場として重要な役割を果たしている点を学生に理解してもらう事が理由として大きい。何よりも博物館館内にある事から、遅くなりがちな見学スケジュールをリカバリー出来る。

しかしながら、感染リスクからこのラウンジの運営も休止してしまい、昼食をどうするかとの切実な問題が発生した。西都原史跡公園内には観光客向けのレストランもあるが、学生達には価格が高く利用するにはハードルが高い。総合博物館から西都原考古博物館までの道中で比較的安価な店舗はあるものの、昼食時には混雑してしまうのでできればこうした問題も回避したい。結局の所、なんとか館内の他とは隔離された場所で個人間の距離をとれる場所はないかと同館に相談した所、クローズしているラウンジ室を空けてもらい、我々の貸し切りで各自持参の弁当を広げる結果となった。こうした混乱は今年度だけで収束してほしいものであるのだが。

関係した各館園、学生保護者には感謝を申し上げたい。

マリンワールド海の中道 (福岡県 福岡市)

実習期間: 令和2年9月1日～9月14日

薬学部動物生命薬科学科

有馬 侑加

私は9月1日～9月14日までの約2週間、福岡県にあるマリンワールド海の中道での博物館実習に参加した。実習生は私を含め6人であった。

初日・2日目は講義を受講した。内容はマリンワールドの概要・組織、水族館の社会的役割、水族館運営・営業戦略、そして海獣類の収集・飼育・展示についてであった。2日目は水族館での教育活動、調査・研究の講義、さらに魚類の収集・飼育・展示についての説明があり、館内の設備や魚類に関わる施設の見学を行った(写真1)。

3・4日目は実習生が2つの班に分かれ、それぞれ魚類課と海洋動物課の現場実習に参加した。私は最初の2日間は海洋動物課の方に参加し、主にイルカ・アシカ・アザラシ・スナメリの体調管理や曲芸の練習、給餌、配餌の方法を直接教わった。また、イルカやアシカショーの立ち合い、ショー前の清掃も行った。動物たちがより安全にショーを行えるようにするのもトレーナーの役割だと感じた。



写真1: 魚類の飼育施設

5・6日目は入館者調査と調査準備を行った。マリンワールドではどのような方が来館し、どのスペースに集客が多く人気があるのかを調査した。この入館者調査の結果は、後日プレゼンテーションした。調査の際には2つの班に分かれ、それぞれが調査方法を考え分析した。私たちの班では来館者の追跡調査を実施し、各スペースでの滞在時間を測定した。

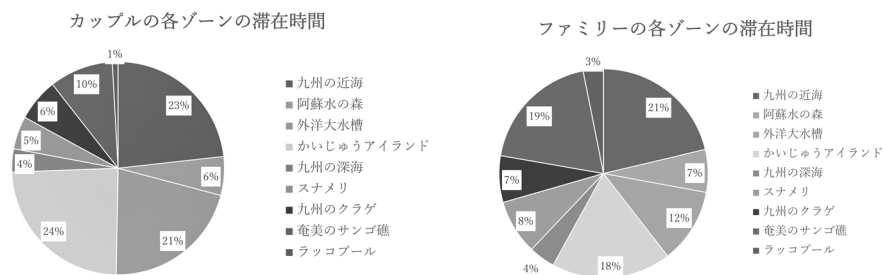


表1: 来館者調査の結果

7日目はスケジュール上では休みだったが、台風の影響により日が前後した。8日目は5・6日目で集めた調査結果をもとにデータのまとめと分析を行った(表1)。9・10日目は現場実習の後半にあたり、魚類課の実習に参加した。魚類は2日に1回給餌が行われている。給餌される魚はアジ、イカ、シシャモ、エビなどだが、展示され

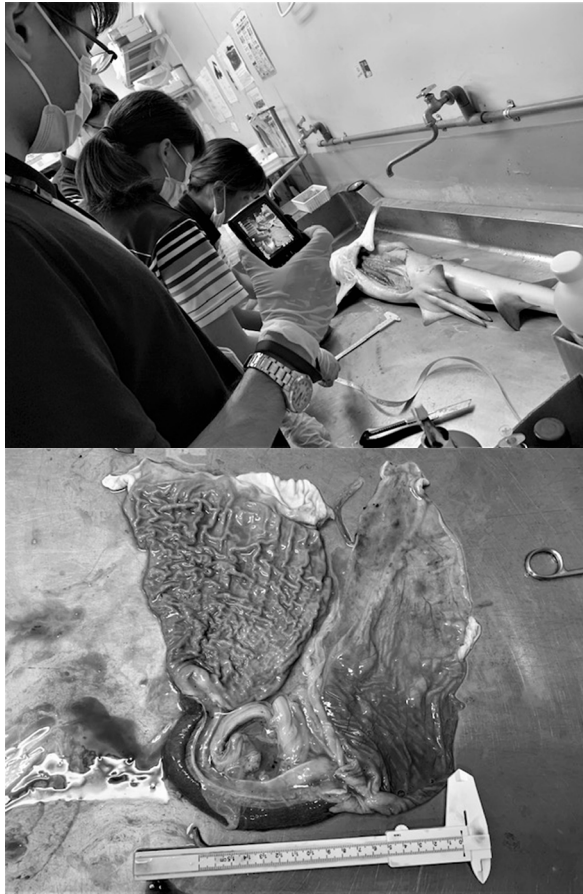


写真2: ネムリブカの解剖

ているカニなどがアジを原型のまま食べるのには驚きが隠せなかった。それ以外では、海底にすむ魚にはカルシウム剤などを含む粉末を給餌し、健康を管理していた。

この日は搬入したばかりのネムリブカが水槽底に落ちてしまい、その死の分析のため解剖に立ち会うことができた。私たちの学科では魚類については学修しないので、知らない器官の名前など体の仕組みについて、獣医師さんが解剖をしながら解説をしてくださった(写真2)。

11～13日目は展示企画制作を目的とした調査を行った。「私たちが水族館で企画展を考えるならば何を行うか」を班で話し合い、そのための調査である。班では入館者調査を引き続き行って調査データ数を増やし

た。その結果、イルカやクジラに興味関心が高い来館者が多い点を確認できたので、それを活かしての企画を検討した。企画案ではVRを使ってあたかも体験者がトレーナーになった気分でイルカショーの運営を体験するシステムや、イルカの動きを指示するトレーナーのハンドサイン一覧を展示するスペース等を提案してみた。我ながらなかなかよくできたのではないかと考えている。

14日目は職員の方々の前で展示企画を班ごとに発表した。自分たちで制作



図1: 展示企画のプレゼンテーション

した企画展についてしっかりと伝えられるか不安であったが、いい評価を頂いた。班で協力していいものを作れたのではないかと改めて感じたのであった(図1)。

この2週間の実習を通して、実際に自分の目で見て体験し、水族館業務について具体的なイメージがもっと広がった。地元で昔から縁があるマリンワールドについての理解が深まり、新たな魅力を発見した。

大牟田市動物園 (福岡県 大牟田市)

実習期間: 令和2年年9月1日～9月7日

薬学部動物生命薬科学科

牛島 滉太

私は福岡県大牟田市にある大牟田市動物園での博物館実習に参加した。この動物園は「動物福祉を伝える動物園」というコンセプトを持ち、環境エンリッチメントとハズバンドリートレーニングに力を入れている。私は動物福祉の考え方に興味があり、それを学ぶことのできる実習に参加したいと考え、この大牟田市動物園を実習先を選んだ(写真3)。



写真3: 動物園の考え方を示したパネル

実習は6つの班に分かれて行われすべての班での活動に参加することができたが、台風の影響で期間が短縮化した上にプログラム自体が無くなった日もあった(表2・3)。

初日はキリン班に合わせた。キリンだけではなくカンガルー・レッサーパンダ・カピ

表2: 実習日程

9/1	9/2	9/3	9/4	9/5	9/6	9/7
キリン班	鳥班	モルモット班	サル班	病院班	猛獣班	台風により休み

表3: 一日の流れ

9:00 ~	集合・点呼・復唱
9:15 ~	展示場の掃除・エサの交換・展示場に動物を出す
11:30 ~	餌の準備
12:00 ~	お昼休憩
13:00 ~	展示場の掃除・トレーニング
15:00 ~	獣舎の掃除・エサを与える
17:00 ~	動物を獣舎に戻す・掃除

バラの飼育にも参加した。カンガルー舎では、カンガルー病の疑いのある個体のレントゲン撮影に立ち会った。カンガルーのような一般的なペットとしては飼われていない動物の保定を生で見るのは初めてだったので、とても良い経験となった。また、午後には弱ってしまっていて前日から立てなくなっていたカンガルー個体が亡くなった。動物園内での動物医療の難しさを学ぶことができたとともに、死亡個体の搬送という貴重な体験を得た。





写真4: 鳥の楽園

2日目は、鳥班での活動であった。鳥類の多くは「鳥の楽園」(写真4)と呼ばれる施設で飼育されている。「鳥の楽園」は一般のお客さんも入れるようになっているので、清掃などを行う際には「お客さんの気持ちになる」ようにとの指導を受けたのが印象的だった。

また、オオヅルの展示場の清掃の際には、油断してツルに攻撃されてしまった。その事が頭にのこり、逆に午後の掃除の際には意識しすぎて作業がおろそかになってしまった。動物との「よい距離感」を気付くことの難しさを痛感したのであった。

3日目はモルモット班での実習であった。大学の講義でも習っていた真菌が流行しているとのことで、隔離飼育がおこなわれていた。大学では座学でしか習わないことに直接観察できたのには感動した。モルモットは多頭飼育を行う動物であるが、この

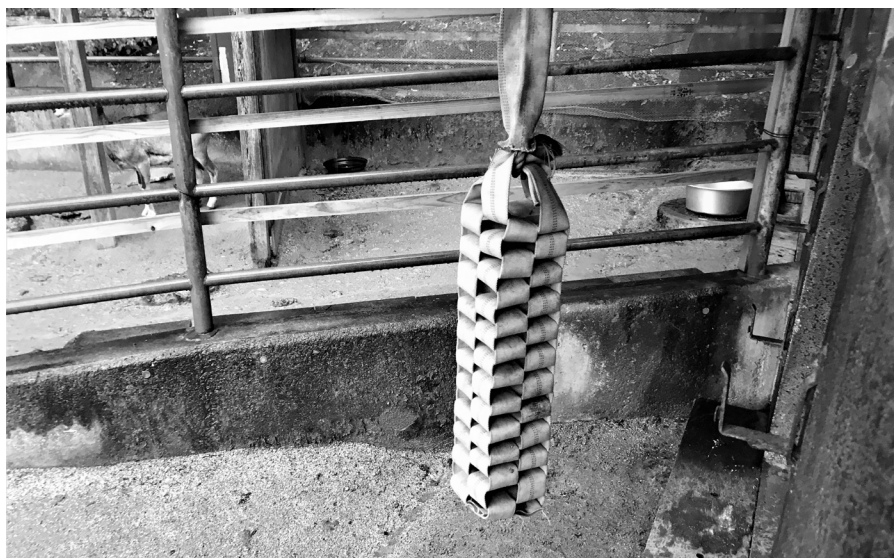


写真5: 多様なフィーダー



写真 6: 遊具は自作されるが、これらの安全性や有用性は確保されないといけない。

動物園では 87 匹が同時に飼育されていた。それだけに個体を体の柄や特徴だけで識別するのは、とても難しかった。

環境エンリッチメントへの取り組みで重要だったのは、給餌である。動物たちを自ら移動させるために餌を隠す場所やフィーダーを用いるなどの工夫がなされていた(写真 5)。

これらの遊具は自作されたり購入されたりしたものだが、その過程で園内の審査を通さないといけないことを知った。そのために必要な「エンリッチメントツール登録シート」も見せて頂いた。動物が扱うからこそ、その安全性や有用性を明確にしなければいけないという(写真 6)。

4 日目のサル班ではサルの採血トレーニングや、アザラシへの投薬トレーニングなどを拝見した。トレーニングをする際に一番大切なのは、トレーニングをするかしないかを動物たちに決めさせている点に他ならない。無理やりではなく、動物たちが自主的にトレーニングに参加してくれるように促すのが大切であるのだ。動物福祉の考え方の一端について、ここへきてようやく納得できた気がした。

5・6 日目は大型の台風が接近しているということもあったので、ほとんどの作業が台風対策となった。避難のために園内の動物病院にスペースを空け、外に出ている動物たちを収容する作業を行った。自然災害時に動物園がどのように動くか、「人だけでなく動物たちの命も守らなければならない」という言葉に強い責任感を感じた。また、このような避難をスムーズに行うために、日常的に動物たちへのトレーニングが必要であり、これも動物福祉につながっているのだと確認した。

実習全体を通して、実際に動物に関わることでしか味わえない経験を得た。天候に恵まれなかったことや、コロナウィルス感染の影響で例年通りの実習スケジュールをこなせなかったのは心残りであった。だが、動物園で働く大変さや、動物園だからこそ味わえる喜びを感じることができ、とても有意義な実習であった。



北九州市立自然史・歴史博物館 いのちの旅博物館 (福岡県 北九州市)

実習期間: 令和2年9月1日～9月5日

薬学部動物生命薬科学科

惠藤 啓介

福岡県北九州市にある北九州市立自然史・歴史博物館 (以下、いのちの旅博物館) での博物館実習 (自然史) に参加した。新型コロナウイルス感染の影響で当初予定の10日間から5日間に短縮された期間での実習であった。私を含めた5名の実習生にはマスクの着用や毎朝非接触体温計での検温が求められ、さらにそれぞれ別の机を使用するなど徹底した感染症対策が行われていた。

初日は実習オリエンテーション・館概要紹介・バックヤード見学・常設展示の見学であった。博物館の歴史・理念について話をうかがった後、午後からは館内見学であった。個人的に1度訪れている博物館ではあるが、解説を受けながら見学し、新たな目線をもって観ることができた。この際、来館者に対して行っている感染症対策について説明を受けた。バックヤード見学では標本の種類や整理・保存、さらに有害虫駆除に関する説明、そしてこの日の実習の終わりに「この博物館をよりよくするためにどうすればよいか」との課題を提出した。



写真7: タグ付けされた魚類標本

2日目は午前中に魚類標本 (タグ付け) を行った (写真7)。作業前に標本の種類についてレクチャーを受けた。液浸・剥製・骨格についてのそれぞれの標本の研究や保存・展示方法にはメリット・デメリットがあり、液浸標本はホルマリンで固定することで発生するカルシウムが溶ける脱灰やエタノールとの違いや濃度について知った。実際の整理作業として淡水魚5匹、うなぎのような細長い標本2匹のタグ付けを行った。

午後からは化石標本整理でバックヤードにある化石標本の番号とコンピュータに登録されているものを照らし合わせ、改めて記載データとの整合性を確認した。わずかに場所や数字の違いが確認できたが、資料管理の難しさを感じた。

3日目は、甲殻類の標本整理・監理を行った。瓶の中に入ったメモにある資料の番号・学名・採取場所・採取年月日・雌雄各数・学名の発表日と発表した人などの記載があ

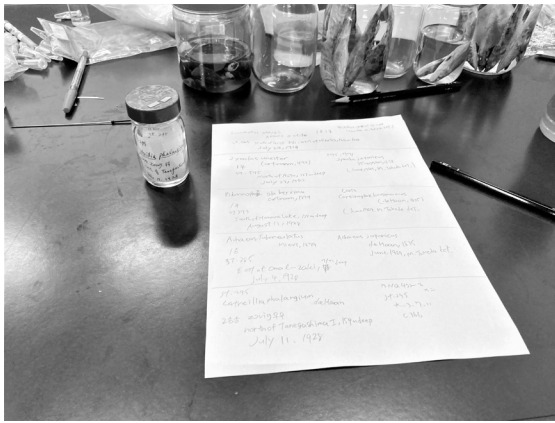


写真 8: 標本の情報を記載する

る情報を書き取り、入力した(写真 8)。この作業において普段使わないラテン語の読解にとっても苦労した。午後は岩石・鉱物標本の整理と登録を行った。資料整理を行う前に、資料そのものの価値を上げるために必要なことについての話を聞いた。標本を長く保存することや、展示・普及に活用すること、保存場所や種類を明確にして扱いやすくすることなどを教えて

いただいた。シンプルな作業が収蔵の基本になるのだと改めて理解した。

4日目は1日かけて昆虫標本の取扱・受入(ラベル付け)を行った(写真 9)。作業開始前に昆虫標本とその作業について講義を受けた。午前にはコツメモドキ系の虫の入った印籠箱のラベリングを、午後はタナシキスイ・ハナノミを2箱、クチキムシの計4箱のタグ付けを行った。思ったより針の扱いが難しく、1点に集中してしまうと標本を落下させたり、資料によって接着度合いや針の大きさ・太さが違い難しかった。しかしこうしたラベル付けが諸記録や論文、そして発表された標本を再検討する場合に探しやすくなるメリットとなる訳であって、博物館学芸員の活動として必要不可欠なものであると理解した。

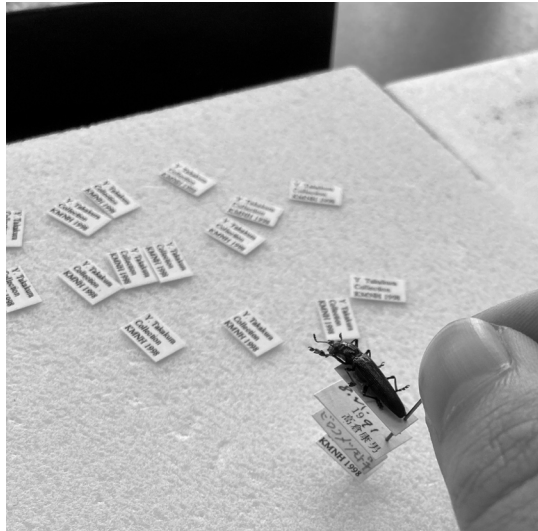


写真 9: 昆虫標本のラベリング

最終日は午前には鳥類標本作成作業でコノハズクの羽の標本を作成した(写真 10)。初列・次列・三列の風切羽を順にコノハズクの体から抜き、羽を中性洗剤と水で洗浄して乾かしてから台紙に貼り付けた。一般的に羽の標本には部位に分けジップロックなどで保存する方法と、今回用いた台紙に貼る方法があり、台紙に貼る方法には位置



写真 10: コノハズクの羽標本

などが理解しやすい利点がある。午後からは化石標本処理・作製作業としてクリーニングを行った(写真 11)。石を割ったり削ったりして化石を石から取り出す作業で、化石を発見することも化石を取り出すことも難しかった。白亜紀後期のアンモナイトが多く入った





写真 11: 岩石標本

石をクリーニングした。大きな化石を取り出すことはできなかったが、二枚貝の小さな化石やアンモナイトを取り出せた。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で実習生間でのグループワークがなく、例年と違う形になってしまい残念だったが、本実習を通して、多くの資料に触れたりそれぞれ担当学芸員からも詳しい話など聞けたり、とても貴重な5日間を過ごすことができた。

改めて多くの資料を管理することや、保存することの難しさを肌で感じる事ができた5日間であった。

みやこ町歴史民俗博物館 (福岡県 京都郡みやこ町)

実習期間: 令和2年9月8日～9月12日

薬学部動物生命薬科学科

原田 真帆

9月8日～9月12日の5日間、福岡県京都郡みやこ町にある「みやこ町歴史民俗博物館」での博物館実習に参加した。同館は平成6年に県下初の町立博物館として設立され、平成27年にリニューアルした。

館内には町内出身で夏目漱石の弟子であり小説『三四郎』のモデルともなった小宮豊隆をはじめ、近代日本の発展に寄与した先人たちの資料や、町内の遺跡から発掘調査によって出土した資料などが展示されている。この博物館は自分の地元であるみやこ町にあり、卒業研究で自分自身が活動している上伊良原神楽について調べていることもあって、実習先として選んだ。

実習初日の午前中は、小学生の学習支援の付き添いとヘリテージ・パトロールを行った(写真12)。学習支援活動では児童見学バスに同乗し、町内にある九州最大規模の長方形古墳である甲塚方墳⇒豊前国分寺三重塔⇒福岡県指定文化財であり公園として整備されている豊前国府跡⇒綾塚古墳(国指定史跡)⇒「昭和」の元号を考案した漢



写真 12: 学習支援・ヘリテージパトロールにて  
学者吉田学軒顕彰碑を見学した。

午後からは国指定史跡の橘塚古墳の見学をした。前日に大型台風が通過したこともあり、破損等がないかヘリテージ・パトロールを行った。帰館後、県の地域振興担当者や文化財保護担当者の来館があり、館の学芸員の方による館内説明に同行した。展示では年齢ごとに館内の説明の仕方が異なっており、工夫しているのがわかった。

2日目の午前、企画展示や小学生を対象としたワークショップについての説明をして頂き、その後収蔵庫を見学した。収蔵庫には多くの資料が保管されており、温湿度管理がしっかり行われていた。収蔵庫に使われている木材は節目の無い保存性の高いものが使用されていた。午後からは刀剣の取り扱い・手入れについて学んだ。本物の日本刀を見るのも触るのも初めてで、とても緊張した。誤った取り扱い方や、安易に使用すると負傷してしまうので注意が必要であると学んだ。

3日目は遺跡から出土した遺物の整理作業を行った。豊前国府跡から出土した土器



写真 13: 上伊良原神楽の衣装

の実測・トレース・観察シートの作成作業を行った。実測図の作成では土器を丁寧に観察・計測して、正面・上面を等倍で図化していった。非常に時間と手間の掛かる作業であると思った。

4日目の午前は、上伊良原神楽の狩衣や袴の資料観察カードの作成を行った(写真13)。狩衣や袴は現上伊良原神楽保存会の会長から寄贈された昭和初期の神楽衣装であり、縫い目や生地などから婦人会によって作成されたものだと判断することができた。午後は同神楽の記録として残っている進文書(明治時代に、神楽を構成する若者組の中心となった進氏による文書)の翻刻作業を行った。一眼レフカメラで全ページを撮影し、撮影した写真を元に書かれている文章をWordに翻刻した。書かれている文章を読み取るのがとても困難である部分もあったが、町内最古の貴重な神楽記録である進文書に触れることができ、上伊良原神楽保存会に所属している自分からすると、とても貴重な体験であった。

最終日は古文書講座に参加した。享保17(1732)年に書かれた日記と弘化2(1845)年に書かれた手紙を解説していく講座で、前日の「進文書」よりも難しく、何を書いているのか全く分からなかった。だが講師の方の説明が分かりやすく、難しかったもののなんとか理解できた。午後は翻刻作業の続きに取り掛かり、その後解説シートの作成を行った。解説シートは、展示物のキャプションを、よりわかりやすく説明したものである。私が作成した解説シートは神楽の演目の1つである「御先」についてである。自分の知っている知識や様々な文献で調べ、解説シートを作成していった。時間の都合上最後まで完成させることはできなかったが、様々な文献を調べていくうちに神楽について自分の知らなかったことを知り、大変勉強になった。

5日間の実習を終えて、博物館での仕事は館内展示の説明だけではなく、館外の町内の史跡の管理、児童・生徒への学習支援、出土遺物整理、企画展示など数多くの仕事がありとても大変だと実感した。



熊本市動植物園 (熊本県 熊本市)

実習期間: 令和2年9月15日～9月19日

薬学部動物生命薬科学科

村上のぞみ

熊本市動植物園は市内中心部からほど近い江津湖畔にあり、園内には約120種700頭の動物と、約800種5万点の植物が、訪れた人の心を癒してくれる。動物園側正面から入ると、まず人なつこいサルたちに会うことができ、さらに進むとライオン・ゾウ・キリンなど子供たちに人気のたくさんの動物たちに出会える。中でも「金絲猴(キンシコウ)」は、「孫悟空」のモデルともいわれ、その金色の毛並みの美しさは格別である。植物園は温室や池もあり年中四季折々の植物を楽しむことができる。動物資料館は、動物の骨格や模型、魚類や両生類を展示しており、月に数回動物に関する講座も開いている。

私は地元の人間として観客側から見たこの動物園を知っている分、管理運営の側面も知ってみたいと考え、ここを実習先として選択した。今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、受け入れてもらえても実際に実施できるのかどうか心配されていた。何度も連絡を取り、期間前や期間中に個人で十分なコロナ対策をしておくこと、熊本県と宮崎県で緊急事態宣言が出されていないことなどの条件をクリアし、9月15～19日の5日間の実習に参加した。実習期間でふれあい班・サル班・大型草食獣班・管理センター・チンパンジー班をそれぞれ回った。

1日目のふれあい班ではモルモット・ウサギ・ヤギ・ヒツジ・ポニーといったふれあいイベントで登場する動物たちの部屋掃除、動物種や老齢個体に合わせた餌づくりを行った。また、半年に1回のニワトリ舎の砂の入れ替えを体験した。砂をバケツに入れトラックに詰め込んでいく作業では、動物園で働くスタッフの体力を目の当たりにした。

2日目はサル班の作業に参加した。キンシコウやリスザル・クロクモザル・マンドリルなどの飼育を行った。人懐っこいキンシコウやリスザルは餌を手渡して与えながら顔や口内、手などの健康チェックを行い、凶暴な動物種も外から見て怪我や行動をよく観察し、毎日の変化を記録していた。一概に「サル」といっても生活環境や食べ物も多種多様な為、餌の準備が大変であった。園内の木を餌として利用したり、食事に飽きがこないように毎日違う葉を与えたり、切り方を変えるなど様々な工夫をしていた。

3日目は大型草食獣班でゾウやキリン・ライオンなど、動物園の<看板動物>たちの飼育に参加した。比較的危険な動物種の多くがこの班の担当になっており、鍵や建物の造りもそれぞれの動物種で異なるため、とても面白みを感じた。ゾウやカバなどは餌を食べる量も排泄物を出す量も多いため、餌運びや掃除はかなりの体力を必要とした。ゾウやホッキョクグマのトレーニングも見学することができたが、動物の健康管理に必要な採血や爪切りは動物種によって人間が危険と隣り合わせる事になるので、毎日コツコツとトレーニングすることが必要である点を教わった。ハズバンドリートレーニングなど動物園同士で情報を交換していることもあるようで、他の園の話も聞くことができた。

4日目の管理センターは様々な理由で展示できない動物たちの飼育をしていた。動物の数は少ないものの両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類と様々な動物種を担当しており、



餌づくりや掃除そして体調管理の方法など多くを学ぶことができた。また、インコ、ヨウムの体重測定トレーニングを見学でき、鳥の楽しそうな姿を見ることができた。

5日目はチンパンジー班での実習だった。チンパンジーはDNAが人間と限りなく近い種であるため、数えるときは「1人」、「2人」とカウントする。採食時間を延ばすため1日に7から10回に分けて給仕しており、寝室・野外展示場・屋内展示場を頻繁に移動させていた。また野外展示場は植林をしており、植林する前の状態と比較できる写真の展示もしていた。フィーダーも多数の種類があり、飼育員とチンパンジーの知恵比べのようでもあった。

今回の実習では動物園での仕事や建物の構造、さまざまな動物種の管理の仕方、動物福祉などたくさんの事を学ぶことができた。動物たちの暇な時間を少しでも減らすとする飼育員の努力や様々な手法は、とても面白く、学ぶことが多くあった。

福岡市動物園 (福岡県 福岡市)

実習期間: 令和2年9月2日～9月4日

動物生命薬科学科

弓本 恵愛

昨今、新型コロナウイルス感染症が拡大しているが、状況を見計らった9月2日～4日の3日間、福岡市中央区南公園にある福岡市動物園での博物館実習に参加した。実習生は私を含め2名の参加で、ほとんどの作業を共にした。

初日は事務所での自己紹介とオリエンテーションを済ませてから園内を案内して頂いた。動物たちもぐったりする程の暑さで、園内全てを回ることはできなかった。

午後からは資料整理実習としてアラビアオリックスの骨格を一点ずつ、前後左右上下の6方向からデジタルカメラで撮影を行った(写真14)。骨には虫が付いているものもあったため、その場合はアルコールでふき取った。撮影を進めていく中でもう一人の実習生が私と違って動物を専門としておらず、どの部位の骨か参考書を見ても分からないと悩んでいた。そこで、私は少しでも理解の手助けができないかと考えて骨を実際に並べてみることにした。私自身も骨を触る経験は少なく、ましてや並べるこ



写真14: アラビアオリックスの骨格標本



写真 15: 椎骨を並べてみた

とは初めてで少し不安もあった。しかし、やってみるとパズルのように楽しく、2人で協力して作業を進めて打ち解けるきっかけとなった。また、骨を並べることは指示されていなかったため注意を受けないか不安ではあったが、むしろ褒めてもらえて最終日まで並べたままにして頂けた(写真 15)。

2日目の9月3日、この日は飼育実習から始まった。朝のミーティングで私はツシマヤマネコとアミメキリンの飼育担当を告げられ、この実習ではもう一人の実習生と別行動となった。飼育員に案内され、事務所の下の階にある部屋で餌の用意をした。キャベツを秤に乗せたバケツに入れて1.5kg測り、そのキャベツと人参・リンゴを包丁で切った。慣れない大きな包丁と、私にとって少し高いテーブルは切るだけでも一苦労だった。いつもマイペースで色々な所で迷惑をかけてしまうのだが、そのことを考えてしまって焦って指を軽く切ってしまった。餌を切る作業をそのまま続けていたが、飼育員の方が気が付いてくれて手当をして頂いた。残りは飼育員が行い、切る速さの違いに尊敬と少し悔しさを感じた。切った餌はバケツに入れ、それとは別にネズミとヒヨコの入ったバケツをそれぞれ持ってトラックに乗り、ツシマヤマネコ舎に向かった。

新型コロナウイルス感染症がネコ科の動物にも感染するということがこの時点で判明しており、警戒のためツシマヤマネコを見ることさえできなかったのは非常に残念であった。寝室裏にネズミとヒヨコの入ったバケツを持って行き、後は飼育員だけがそのバケツを持って入っていったのを見届けると、給餌や健康チェックなどが終わるまでの数分間、私は何もできずに立ち尽くして待っていた。

次にアミメキリン舎に向かったが、その途中、前夜にきた台風の影響で木の枝や葉っぱ、園内のゴミ箱などの備品が飛散していた。その片付けや掃除で1時間ほどのロスになってしまったが、災害に対して動物園がどんな対応を行うのかがよくわかり、自分としては貴重な体験ができたと考えている。掃除がある程度終わると雄⇒雌⇒同年に生まれたばかりの子供の順番でアミメキリンを運動場に出した。子供のアミメキリンは私や飼育員への警戒心が強く逃げ回っていたが、雄のアミメキリンは人懐っこい様子がかがえ、手を伸ばすと顔を近づけてきて触れることができた。

その後トラックに積んでいた餌と、倉庫内にある別の餌とを運動場に設置してある

餌入れ用の木箱に入れた。アミメキリンたちはすぐに寄ってきて美味しそうに食べ始めた。キリンたちをゆっくり観察する間もなく寝室の掃除を始めた。糞を取り終わると床砂を下から起こして柔らかくしていった。これがとても重労働で、尿と一緒に踏み固められた部分は固く、筋力のあまりない私は苦勞した。ここで集めた糞は大きな機械で発酵させ、肥料にした。アミメキリン舎の裏から階段を上がると寝室の水飲み場と軽食用の木の枝があった。水飲み場を簡単に洗って水を換え、丁度木の枝が台風で飛ばされてきていたのでそれと交換した。

以上の作業で飼育実習は終了した。コロナ対策でマスクをしたままの作業が息苦しい中、想像以上の重労働でとてもきつかった。だが、その分達成感を強く感じる事ができたのも確かである。

昼食後に動物情報館の見学を行った。まず動物園と野生動物の関りなどのお話を聞き、次に情報館内の体験ラボ、その他の設備やイベントの企画の説明をして頂いた。老若男女問わず楽しみながら福岡市動物園や動物たちのことを学べるようなものが沢山あり、教育普及に力を入れていることがよく分かった。

次に、翌日の自主研究に向けての題材探しを行った。例年ならばこの自主研究に時間を割いているとのことだが、今回は時間短縮となったため、短い時間で可能なことを行わなければならなかった。もう1人の実習生とで園内を歩き回りながら題材になりそうなものを探して写真を撮りまくった。結局、この日はお題を決められずに終わった。

最終日の9月4日、朝のミーティングが終わると各自決めた自主研究に必要な資料を用意して頂いた。私は動物園でしかできないことをやってみようと思い、動物たちの足型を採ることにした。簡単な小動物での実践を勧められたので、道具を持って向かった。しかしふれあいコーナーで飼育員に説明をしてから道具を確認してもらったところ、インクを動物が舐めてしまうリスクがわかった。代わりに舐めても大丈夫な野菜の汁や水を提案してもらったのだが、野菜の汁は限られた時間内で上手く搾れるのかわからず、さらに水だとさらに色が薄い上に乾燥が早い。そうしたことからこの研究は諦めて他を探した方が賢明だと判断した。



写真 16: 書置きの上でチモシーおもちゃ乾燥中





写真 17: 枝に引っ掛けて乾燥中

他に何ができるのかアイデアを思い浮かべていたのだが、ふれあいコーナーにいるモルモットたちを眺めること数分、「この子たちのためにおもちゃを作ろう」と考えてみた。実際に作った経験はないが、作り方は本などで見たことがあったため、記憶を頼りにやってみることにした。

飼育員にモルモットたちの餌であるチモシーを少し分けてもらえないか交渉し、これをバケツの水に浸した。ふやけて柔らかくなったチモシーを繋げながらひたすら三つ編みにしていった。これを続けることおよそ3時間、長い三つ編みの干し草ロープができ

た。当初はこれをボール状にまとめるつもりだったのだが、思ったより小さくなりそうで、何よりせっかく編んだ三つ編みがほとんどみられなくなってしまうのが残念だ。そこで他のまとめ方を考えたところ、リース状にしてみることにした。厚みを増すために何もしていないただのチモシーの束を一掴み、これをリング状にまとめ、その上から固定するように編んだチモシーを巻いてみた。そうすることで網目もほとんど見え、モルモットたちには噛み応えがあるおもちゃになった。

また、リース状の形状は、モルモット数匹で引っ張り合いながら遊べる利点もある。ただ、そのままの状態ではまだ湿っているため、後はひたすら乾燥させた。初めは事務所前で乾かそうと思いい日当たりのいい場所に書き置きと一緒に置いていた(写真16)。しかし、動物や来園者のご飯を狙ってか野生のカラスが多く飛来しており、おもちゃを持ち去ったり壊したりしないか不安になったので、持ち歩くことにした。あまり触れていると形が崩れてきてしまうため、木の枝に引っ掛けて日に当たるようにしながら歩いた(写真17)。発表時間が近づくと自主研究内容をまとめるために事務所に戻り、日は当たらなかったもののおもちゃを窓際に置き、気休め程度に乾燥剤(シリカゲル)を傍に置いた。それから発表内容としてただおもちゃを作っただけでは実習の締めくくりとしては寂しいと思い、教育普及に使えるか再考した。そこで、モルモットなどの常生歯の動物が固いものを齧らなければならない理由とともに発表することにした。

画用紙2枚分にモルモットやウサギの絵を用い、見えやすいように大きな字に縁取りをしたり、子供でも読めるようにフリガナを書いたりしてパネルを作成した。残り時間数分の中で慌てて書いたため、書き間違いには後日気づくこととなった。

自主研究の発表は先にもう一人の実習生が発表し、私も続いて発表した。おもちゃは大学に持って帰ることを勧められたが、大学の発表時まできれいに保存できる保証



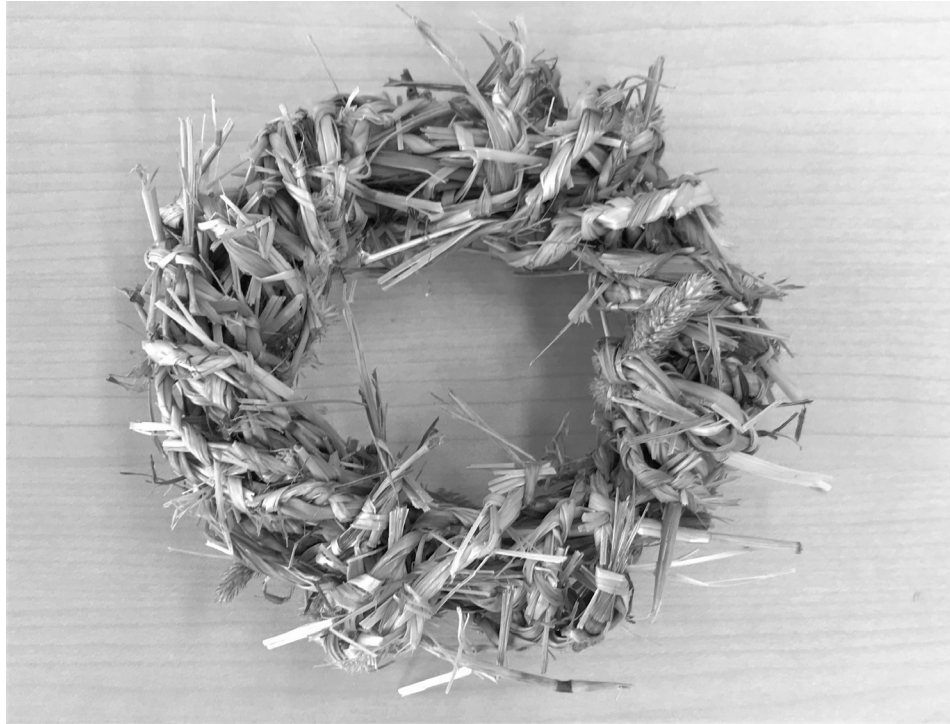


写真 18: 完成したチモシーおもちゃ

もなく、なによりモルモットたちが遊ぶことを願いながら作ったため、使っていただくようお願いしてプレゼントした。実際にモルモットたちに渡ったのか、遊んでくれたのか、噛み応えは良さそうだったのかなどは知らない。喜んでくれていたらいいなと願うばかりではある(写真 18)。

発表が終わると、残り 1 時間ほど動物園内にある動物病院の見学をした。入院動物の説明を聞き、給餌の手伝いをした。それから病院に保管してあるゾウの足の皮やサイの皮膚を触らせてもらい、クジャクの羽を新聞紙に包んで記念に頂いた。

以上で福岡市動物園での博物館実習は終了した。3 日間という例年より短い時間ではあったが、多くの体験をすることができた。特に資料整理や自主研究では、普段は周囲に合わせるばかりの私が自主的に行動できた場面を実感し、今後の自信につながる経験となった。

また、もう一人の実習生が私と違う専門の学科で、同じ学芸員を目指す者とは言いながらお互い異なった視点からの学芸員や博物館についての認識をうかがうことができた。今回、彼女とともにできたことも、私にとっては貴重な経験であった。